

つれなき麗うるわしの妖精

ジョン・キーツ

一 おお 何がそなたを苦しめる 哀れな姿で

ただひとり 顔蒼あおざめて彷徨さまようは

菅草すげは 湖いずみの辺かたに萎しおれ果て

歌うたう 鳥もなし

二 おお 何がそなたを苦しめる 哀れな姿で

かくやつれ かく悲しむは

栗鼠りすの穀倉くらは 蓄たくわえに満ち

収穫とりのいれは いまや了おわりぬ

三 そなたの額ひたいは 百合の花はな色いろに染まりゆき

苦悶くもんに濡ぬれ 熱たまあせき玉汗たまあせにじみ出いず

そなたの頬ほほの 薔薇ばらの花はな色いろ移うつろいて

瞬はなく間まもなく 萎しれて果はてぬ

四 草原くさ原はらにめぐり逢あいしは ひとりのおかた

いと麗うるわしく さながら奇くしき妖精まじのごと

そのかたの御髪みぐしはなびき 御足みあしは軽かろく

そのかたの御目みめは怪あやしき

五 だく足あしに進すすむ駿馬しゅんめにそのかたを乗のせ

ひもすがら ほかに目移めうつろうことぞなし
かたわらにそのかたは身みを寄よせ 歌うたう

さながら 奇くしき妖精まじの歌

六 そのかたの頭こゝろに われは花輪はなわ捧たげぬ

花の腕輪 花薫る飾り帯も
そのかたは 恋するごとくわれをみつめて
甘き呻うめきの声こそ 発たてぬ

七 そのかたは われにみつけぬ

甘き草の根 野の蜜とマナの露つゆ

不思議な言葉で 紛まじうかたなくそのかた言いぬ

「真実まこと そなたを愛しています」

八 そのかたは 奇ほらあなしき洞穴にわれを誘いざない

してそこで われを見つめて深きため息

われは 優くちづけしき接吻をもて

そのかたの 怪まごたしき悲しき瞼を閉じぬ

九 してそこで 苔むす石を枕に二人して眠りに落ちぬ

われは夢みぬ ああ 呪のろわしき夢

今しがた 夢みし夢よ

冷たき丘の中腹かたわらで

十 われは見し 蒼ざめし王や王子ら

蒼ざめし兵士ら みな死人のごとく蒼白く
彼ら叫びぬ 「つれなき麗しの妖精
そなたを捕えぬ！」

十一 われは見し 黄昏たそがれのなか彼らのやつれし唇くちびるが

忌いまわしき警いましめをもて うち開かるを

してわれは 目覚めてここにわれを見ぬ

冷たき丘の中腹かたわらに

十二 しかしてわれはここにあり

ただひとり 顔蒼ざめて彷徨さまよいつ

菅草は 湖いづみの辺かたに萎れ果て

歌うたう 鳥もなけれど

(山中光義訳)